

## 楔形文字と漢字かな混じり文（2） －アッカド語と日本語の表記法について－

峯 正 志

### 1 はじめに

日本語の表記法の特徴を考えるには、他言語の表記法との比較が欠かせない。その際には、日本語と類似した表記法を持つ言語との比較が、そうでない言語との比較より重要であろう。例えば、表音文字のみを用いている言語よりも、表音文字と表語文字とを混用している言語との比較の方が、より有益であると筆者は考える。そのような観点から筆者は峯（1989）において、シュメール語と日本語の表記法の比較を行なってみた。本稿では、日本語やシュメール語と並んで表音文字、表語文字の混用を行なっている古代オリエントの一言語であるアッカド語の表記法を取り上げて、日本語の表記法との比較を行なってみたい。しかし、アッカド語は2000年以上にもわたって書き続けられた言語なので、時代ごと地域ごとに表記法もかなり異なっている。従って本稿では、古バビロニア期に書かれたハムラビ法典の表記法を中心に考察する。

### 2 アッカド語の言語的性格と楔形文字資料

日本語の表記法との比較に入る前に、アッカド語の言語的性格と楔形文字資料について概観しておくのが有益であろう。

#### 2. 1 アッカド語の言語的性格

アッカド語は、言語的にはセム語族に属する一言語（東セム語族）である。膠着的であったシュメール語と異なり、屈折的な言語で語形変化が激しい。このことはアッカド語の表記法に大きな影響を与えている。後に詳述する。

##### 2. 1. 1 音韻的性格

アッカド語はシュメール語にはない音素を幾つか持っている。もともとシュメール語の表記のために創られた楔形文字では、これらを完全には表記できない。下にシュメール語とアッカド語の音素表を掲げる。

1) アッカド語 (Ungnad-Matouš 1969 による) 2) シュメール語 (筆者作成)

	有声	無声	強調	鼻音
歯音	d	t	ṭ	n
両唇音	b	p		m
口蓋音	g	k	q	
歯擦音	z	s, ṣ	š	
流音	l, r			
喉頭音		'		
軟口蓋音		h		

	有声	無声	強調	鼻音
歯音	d	t		n
両唇音	b	p		m
口蓋音	g	k		g
歯擦音	z	s, ṣ		
流音	l, r			
喉頭音				
軟口蓋音		h		

母音：a, e (2次的), i, u

母音：a, e, i, u

これからわかることは、セム語に特有の強調音 (emphatic sounds : ṭ, q, š) が表記できないということである。

また、シュメール語は、無声破裂音が音節末に来ることを許さないが、アッカド語は許す。<sup>1)</sup>従って、音節末の無声破裂音の表記も本来は不可能である。

### 2. 1. 2 形態的性格

アッカド語はセム語の1言語であるから、多くの語は3子音で形成されている。この3子音が複雑な母音パターンにしたがって変化し、動詞の活用を行なう。動詞は接中辞を伴ったり複雑な形態変化を行なうので、表語文字より表音文字の方が有利である。

### 2. 1. 3 統語的性格

基本語順はセム語には珍しくSOVであるが、これは、シュメール語の影響ではないかといわれている。

### 2. 2 アッカド語の楔形文字資料

基本的にシュメールと同様の粘土板に書かれる。シュメールの場合は「コラム」と呼ばれる細長い欄に分けられるが、アッカド語の粘土板の場合はそれがない。有ったとしてもせいぜい左右の2つのコラムに分けられるだけである。これは、シュメールの粘土板とは大きく異なっている。このことは、シュメール語の表記法との大きな違いを生んでいる。もっとも、ハムラビ法典の場合は、円柱形の石に書かれているため、シュメール語と同様コラムと行に別れている。

## 3 日本語との共通点及び相違点

佐竹 (1989) は、日本語の表記の特徴として、

- 1) 表記に使う文字体系の種類が多く、また、文字の数も多い。
- 2) 分かち書きをしない。
- 3) 縦書きと横書きとの両方が行われている。
- 4) 語表記に多様な表記法が存在する。

の四点をあげている。

これを出発点として、アッカド語と日本語の表記法の比較を行なってみたい。しかし、比較の前に明確にしておかなければならないことがある。それは、アッカド語の表記法はシュメール語から引き継がれたものだという点である。アッカド語に合うように工夫して用いられているけれども、基本的にはシュメール語の表記法と同じである。従って、本稿では、共通点、相違点とも、1) シュメール語からの継承、2) アッカド語における改新の2種類に整理分類し記述するという形式を取る。

### 3. 1 共通点

#### 3. 1. 1 シュメール語から受け継いだ共通点

##### 1) 表語文字と表音文字の混用

まず、シュメール語から受け継いだ共通点から考えてみたい。第1に、アッカド語も、日本語、シュメール語と同様、表語文字と表音文字を混用しているということである。しかし、シュメール語と比べると、表語文字の使用頻度はやや低くなっているように思われる。シュメール語では、実質語 (content word) は表語文字、機能語 (function word) は表音文字という分布であったが、アッカド語では、表音文字の機能負担量が多くなっている。例えば、動詞はほとんど表音文字で表記される。これは、膠着的なシュメール語と違い、アッカド語は語形変化の激しい屈折的な言語であることと関連していよう。例を挙げる。

KH 121 24) šum-ma-wi-lum 25) i-na É a-wi-lim 26) ŠE iš-pu-uk  
 šumma awilum ina bīt awilim še' am išpuk  
 「もし」「人が(主格) 処格「家」「人の(属格)」「大麦」「貯える(過去形)」  
 「もし人が、(別の)人の家に大麦を貯蔵したら、」

上段は一字ずつの翻字である。その下の段はそれをアッカド語読みにしたもの。その下の段は逐語訳、最下段は全体の訳である。「家」と「大麦」が表語文字で表され、動詞と「人」は表音文字で表されている。「人」が表語的に表されなかった理由はわからないが、動詞が表音的に表された理由は明らかである。シュメール語の動詞 DUB を表す表語文字では、使われている動詞が現在形 (išappaku) なのか (išpuk) なのか区別できないからである。シュメール語のような膠着的な言語であれば、表語文字を使っている場合、接頭辞や接尾辞を表音文字で付け加えればすむの

だが、セム語のように語形全体を変化させて統語的機能の変化を表す言語だと、表語文字で表すものは非常に不都合である。アッカド語がシュメール語から文字を受け継ぎながらも次第に表音的な表記に推移していったことは、このことを考慮すれば当然の成り行きであったように思える。

さて、このように表語文字と表音文字との混用が見られるといっても、その混用の仕方は両者の間で大きく異なっている。日本語のほうは一種類の表語文字(漢字)と二種類の表音文字(ひらがな・かたかな)という三つの異なった文字体系を混用しているのにたいし、アッカド語のほうは楔形文字という一つの文字体系を表語と表音に両用しているのである。このことについては、3. 2. 1でもう一度触れる。

2) ひとつの文字が多くの意味と読みを持っている。

佐竹(1989)では挙げられていないけれども重要な日本語表記上の特徴の一つに、一つの文字が、多くの読みや意味を持っているということがあげられる。これもシュメール語における表記法をそのまま用いたことの反映である。例えばシュメール語では、KAは、kaと読めば「口」、kir<sub>4</sub>と読めば「鼻」、zúと読めば「歯」、inimと読めば「言葉」「命令」、du<sub>11</sub>/dug<sub>4</sub>と読めば動詞「言う」「話す」である。それと同様にアッカド語では、pûと読めば「口」、appuと読めば「鼻」、šinnuと読めば「歯」、awātuと読めば「言葉」である。ただし、「言う(アッカド語でqabû)」の場合は、上で述べたように、この文字を使って表語的に表すことはせず、表音的に(現在形ならば) i-qá-ab-bi (= iqabbi )、(過去形ならば) iq-bi (= iqbi) と表される。

しかし、この多音性は、多義性故に生じたものである。ある表語文字がいくつもの意味を持っているから、それに対応するいくつかの読みが存在するわけである。アッカド語がシュメール語と違うのは、シュメール語の場合は、表音文字として使われる場合は大体一語一音として用いられるが、アッカド語の場合はそうではなく、表音文字としてもいくつかの音を持っているということである。この違いについては、3. 1. 2で述べる。

3) 振り仮名や送り仮名の存在

上で述べたように、一つの文字がいくつもの意味を持つ結果、文字の読みや意味を限定するための送り仮名や振り仮名が存在している。日本語の送り仮名に相当するのが phonetic complement (音声補語) と呼ばれるものである。しかし、シュメール語における音声補語とはいくぶん違うように思われる。それは、シュメール語の場合は、文字の最後の子音を次の文字の語頭音で繰り返すというものであったが、アッカド語の場合は、シュメール語の表語文字もアッカド語読みしており、その語の最後の部分を適当に繰り返しているだけである。

例えば、

KUR-ú = šadû, KUR-ti = māti または kišitti, KUR-ud = akšud  
GAR-un = iškun または aškun, GAR-an = aštakan  
DINGIR.MEŠ-ni = ilāni<sup>2)</sup>

ハムラビ法典の場合は、振り仮名の例は無いが、アッカド語では稀ではない。<sup>3)</sup>

4) シュメール語と同様に、文字の読みや意味を限定するためのもうひとつの手段である限定符 (determinative) が存在する。シュメール語におけるものとほぼ同様である。<sup>4)</sup>

これは機能的に漢字の偏に当るものであると思う。ただ書記材料の関係で、一語の形にはならなかったものと思われる。

#### 5) 複数の表記法の存在

日本語では一つの語に複数の表記法が存在するが、アッカド語でも同様である。まず、同じ語が表音的に表されたり表語的に表されたりする。<sup>5)</sup> また、表音文字で表わされた場合でも、その表記法は一定していないことがあるからである。3. 1. 1. で述べたように、表音的に表されることが多くなっているのので、同じ形式が様々な表記で表されることがある。例えば、

ša a-ka-lim / ša a-ka-li-im 「食物」等。

#### 3. 1. 2 アッカド語の改新による共通点

3. 1. 1 で述べた共通点は、ほぼシュメール語における表記法を踏襲したことによるものであった。本節では、アッカド語における新しい表記であって、しかも、日本語の表記法と共通するものについて述べる。

#### 1) 訓読みの発明

さて、アッカド語のシュメール語の表記法との違いの中でもっとも重要なものは、音読み、訓読みの区別であろう。シュメール人が楔形文字を発明したというのが定説であるので、中国語に訓読みが存在しないと同様、外国語読み、自国語読み、という意味での音読み訓読みの区別はシュメール語ではありえない。しかし、シュメール人から楔形文字を受け継いだアッカド人にはこの区別は存在する。そして、このことが、アッカド語の表記法を更に複雑にしているのである。

アッカド人がアッカド語の表記のためにどのような工夫をしたのかを少し考えてみたい。Labat (1976 : p. 10ff. ) によると、次のような工夫が取り入れられたという。<sup>6)</sup>

アッカド人の工夫：アッカド語の表記のための読み方が加えられる。

#### ① アッカド語の読み方を音価として取り入れる。

シュメール語：Á アッカド語：idu → 音価 id

シュメール語：GIŠ アッカド語：iṣu → 音価 iṣ

- ② 母音を変化させた。例えば, uh は, ah, eh, ih とも読める。
- ③ 無声音と有声音の公替。例えば, ba から pá, bi から pí, ti から di 等が出来た。
- ④ 語頭や語末の母音・子音を取りのぞいた。例えば, dam から出来た tám は, 語末の-m が落ちた ta<sub>4</sub>の音価を持つようになった。また, utu から, 語頭の u- を取った tú という音価も出来た。
- ⑤ m を付加した。例えば, rù から rum が出来た。これは mimation<sup>7)</sup>を伴った単数主格形の表記のために発達した。

Gelb (1962 : p.72) によれば, エコノミーの原則として 1) 母音の多様化, 2) 子音の多様化, の 2 つが挙げられるという。それぞれ Labat の②, ③にあたる。

このようにして, アッカド人は次第に多くの読みを獲得していった。3. 1. 1 で述べたように, アッカド語の場合はシュメール語の場合と違い, 表音文字としての複数の音価を持つが, それは, アッカド人がこのような工夫をしたことによるのである。

## 2) 分ち書きをしない。

佐竹は, 分ち書きをしないことを日本語の表記の特徴としていた。峯(1989 : p.50) で述べたように, シュメール語においては, 分ち書きをしないところは日本語と同じだけれども, その代わり意味のまとまりごとに改行する。つまり, 意味のまとまりごとに頻繁に改行し, 意味をとり易くしているのである。多くの場合, いわゆる文節ごとに改行するのであるから, 実質的には分ち書きと同様のことをしているのである。

アッカド語も普通分ち書きはしない。しかし, シュメール語のように頻繁に文節ごとに改行はしない。もっとも, ハムラビ法典の場合は, シュメール語のごとく頻繁に, 名詞句ごとの改行が行なわれている。<sup>8)</sup>

## 3. 2 相違点

これまでは, シュメール語の表記と日本語の表記の共通点を考えてきた。この節からは相違点を考えていきたいと思う。

### 3. 2. 1 シュメール語から受け継いだ相違点

#### 1) 1種類の文字体系しか用いていない。

もっとも重大な相違点は, 楔形文字は1種類の文字体系しか用いていないということである。これは3種類(ローマ字を入れれば4種類)もの文字体系を用いている日本語との大きな違いである。

楔形文字の書体は, 時代が下がるにつれて次第に簡略化の道をたどり, 初期王朝期の頃の文字と neo-assyrian と呼ばれる文字とはほとんど別な体系の文字と思え

るほど異なっている。しかし、これは単に文字の書き方が簡略化されただけであって、日本語のかなのような簡略化された別の文字体系を発展させたわけではない。

しかし、一般的に言って、比較的表音文字としてよく用いられる文字は画数の少ない簡単なものが多く、表語文字として用いられる文字は画数の多い複雑なものが多いのも事実である。

2) 同じ文字が表語文字としても表音文字としても用いられる。

上で述べたように、楔形文字では一種類の文字体系しか用いていないので、同じ文字が表語文字としても表音文字としても用いられる。日本語の場合は、かなは、表音文字としてだけ用いられ、表語文字として用いられることはない。漢字は、「当字」のような表音的用法もあるけれども、基本的には音読みであろうが訓読みであろうが表語的に用いられている。これに反して楔形文字では、同じ文字が、ある場合には表語文字として用いられ、またある場合には表音文字として用いられるのである。

### 3. 2. 2 アッカド語の改新による相違点

#### 1) 横書き

日本語は縦書きも横書きも行なわれるが、アッカド語は横書きである。これもシュメール語からの受け継ぎといえるであろう。しかし、シュメール語の場合は、横書きといっても多少変則的であるということをも峯(1989)で述べたが<sup>9)</sup>、アッカド語の場合は、普通の横書きと言ってよいであろう。従って、これはアッカド語の革新と捉えてもよからう。ただし、ここでもハムラビ法典は特殊で、横書きとなっている。

#### 2) 日本語の音読み・訓読みとの違い

日本語にもアッカド語にも音読み訓読みの区別があると言われて、その類似点にばかり注意が向けられているきらいがあるので、本節ではその相違点に注目してみたい。

日本語の場合、「白」という漢字は音読みで「はく」、訓読みで「しろ」と読む。重要なことは、「はく」と読むにせよ「しろ」と読むにせよ、「白い」という意味と結びついているということである。つまり、日本語では、漢字が表語文字としてしか用いられないため<sup>10)</sup>、音読みであれ訓読みであれ、意味と固く結びついているのである。これに反し、アッカド語では、音読みも訓読みも意味とは全く結びついていない。いずれも表音文字として用いられた場合の読みであって、意味を連想させることは無い。

例えば、「水」は、音読みで「スイ」、訓読みで「みず」であるが、ともに同じ意味を持つ形態素である。しかし、アッカド語の場合、例えば KAL(シュメール語で「強い」)は、dan(アッカド語:dannu「強い」より。すなわち訓読み。)または kal

(音読み)と読まれるが、どちらも「強い」という意味とは結びついておらず、純粹に発音文字としての音価である。同様に ŠÀ (シュメール語で「心」)は ša (音読み)または lib, lip (アッカド語: libbu 「心」より。すなわち訓読み。)と読まれるが、どちらも表音文字としての読みで、意味とは結びついていない。

また、音読みと訓読みを比べると、圧倒的に音読みが用いられる。上で挙げた KAL や ŠÀ のように、音読みも訓読みも共によく用いられるような文字は少数派である。

このように、日本語と同様に音読み・訓読みを持っていると言われているが、細かく調べてみると、用いられ方が微妙に異なっているのである。

## 5 まとめ

以上の論議をまとめてみよう。アッカド語の表記法と日本語の表記法の共通点は以下の通りである。

- 1) 表語文字と表音文字の混用が見られること。
- 2) 一つの文字が、多くの読みや意味を持っていること。
- 3) その結果、文字の意味を限定するための送り仮名や振り仮名および漢字の偏に相当する限定符が存在していること。
- 4) 一つの語に、複数の表記法が存在すること。
- 5) 音読み、訓読みの区別が存在すること。

一方、相違点としては、

- 1) 一種類の文字体系しか用いていない。
- 2) そのため、同じ文字が、表語文字としても表音文字としても用いられている。
- 3) 日本語と同様、分ち書きはしないけれども、名詞句ごとに頻繁に改行し、意味をとり易くしている。(ハムラビ法典では)
- 4) 日本語のように横書きでも縦書きでも良いというのではなく、横書きである。(しかし、ハムラビ法典は縦書き。)
- 5) 日本語と同様、音読み・訓読みがあるといっても、微妙な違いがある。といった点が考えられる。

## 6 おわりに

日本語の表記法の特色を考えると、音読み・訓読みの問題はよく取り上げられる。その際、アッカド語との類似点がよく指摘されるけれども、本稿で述べたような微妙な相違点が指摘されたことは従来無かったのではないだろうか。本稿の目的は、日本語とアッカド語の表記法の全体的な比較であったので、この点だけ取り上



げて詳しく議論することはできなかった。将来の課題としたい。

註

- 1) 無声破裂音は許さないと言ったが、kの場合は、例は少ないけれども、音節末に来ることもあったようである。例えば、ak, tuk等。アッカド語の場合は、どの音素も音節末に位置し得る。
- 2) Borger (1963) p.41 より。
- 3) Falkenstein (1959) p.18 参照。
- 4) シュメール語の限定符については峯 (1989) を参照のこと。
- 5) このことはシュメール語とは若干異なる。シュメール語では、もっぱら表語的に表される語と表音的に表される語が区別されているようである。
- 6) Labatはこの記述を Thureau-Dangin (1926) に基づいたものであるとしている。筆者は残念ながら未見。
- 7) アッカド語の名詞語尾の m 音。Ungnad-Matouš (1969) p.49 参照
- 8) しかし、かなりいい加減な改行をしている場合がある。次の例は、名詞とそれを形容している形容詞が2行に別れて書かれている例：

KH 129 43) it-ti zi-ka-ri-im      44) ša-ni-im  
itti                      zikarim      šanim  
前置詞「～と共に」「男」      「他の」  
「他の男と一緒に」

cf. 131 71) it-ti zi-ka-ri-im ša-ni-im

次の例は、前置詞と名詞が2行に別れて書かれている例：

KH 125 76) mi-im-ma ša a-na      77) ma-sa-ru-tim id-di-nu-šum-ma  
mimma      ša ana                      mašsarūtīm      iddinūšumma  
「もの」 関係詞 前置詞「～に対して」 「保管」      「彼に与えた」  
「彼に預けた物」

また、次の例は一語が2行にわたって書かれている例：

KH 125 71) u lu i-na na-ba- 72) -al-ka-at-tim  
u lū      ina                      nabalkattim  
「または」前置詞「～の中で」 「梯子(?)」  
「あるいは、掠奪で (<梯子で以て))」

- 9) P. 51 「しかし、面白いのは、横書きといってもそれは名詞句単位でのことであって、その名詞句は縦に並ぶのであるから、文単位では縦書きなのである。横書きであるといっても、このことは頭に止めておく必要があるであろう。」

10) 当字のような特殊な例は除く。

#### 引用文献

- Borger,R. 1963. *Babylonisch-Assyrische Lesestücke, Heft I.* Roma
- Falkenstein,A. 1959. “Das sumerische”, in *Handbuch der Orientalistik.* Leiden
- Gelb, I.J. 1962. *A Study of Writing.* Revised edition. Chicago & London
- Labat, R. 1976. *Manuel d' Epigraphie Akkadienne.* 5th edition. Paris
- 峯 正志 1989.「楔形文字と漢字かな混じり文 –シュメール語と日本語の表記法  
について」 広島大学留学生日本語教育 第2号 p.44～53 広島
- 佐竹 秀雄 1989.「表記」『講座日本語と日本語教育1：日本語学要説』  
明治書林
- Thomsen,M.-L. 1989. *The Sumerian Language.* Mesopotamia Vol.10. Copen-  
hagen
- Thureau-Dangin,F. 1926. *Le Syllabaire accadien.* Paris
- Ungnad,A. & Matouš,L. 1969. *Grammatik des Akkadischen.* Munchen